

現代農業

作業を
ラクに

野菜を
元気に

[特集]

土寄せで ガラリッ

サトイモ・ジャガイモ・
ショウガは土寄せで太る
トウモロコシやミニトマトも
実験 土寄せでネギはどれだけガラリッ?
機械・道具を使いなす
土寄せいらず栽培もおもしろい

イネ ● 葉っぱを調べて1俵増収
葉齢調査でイネがわかる

ミニトマト
味を落とさず収量1.5倍
サトイモは水田栽培で増収

梅仙人の黒焼き梅で
150歳まで生きる!?

- 夏のイチゴ挿し苗、活着率を上げる
- リンゴのシール式芽接ぎ
- シャインマスカット、袋の色で良品を
- 子牛のお産介助に「神の手」
- ドクダミ・スベリヒユ栽培で稼ぐ
- 園芸農家がつ作った地域の助っ人会社

平成28年

7

2016年

農文協



モミ重量で九〇〇kg

葉っぱではなく、

穂に肥料をくれないと

大分県杵築市・平田田寿郎さん

五月号で紹介した大分県日出町の鈴木養鶏場に出荷する飼料米生産者たち。今回は多収農家ベスト五の常連で、昨年モミ重量で九〇〇kg（反当たり、以下も）をとった、平田田寿郎さん（七十二歳）のイネつくりを紹介する。

小さいお米も収量のうち

開口一番、こんな言葉。

「オレのはイネつくりじゃありません。まるで素人。名人のイネは無効分けつがなくピシッと穂が揃って出穂するけど、オレのは刈るときにまだ青い。下からダラダラと分けつが出てく

るイネ。参考にしないでくださいよ」

——ただ、モミで与える飼料米なら、小さいお米も収量のうちですよ。

「あーっ、そうやな。オレにむいちょるわ（笑）」……。

そうはいうものの、稲作シーズンともなると、朝飯前と夕方には必ず田んぼに行つてイネのようすを見て回る。相当熱心な稲作農家に違いない。

青田を育ててワラづくり

平田さんのイネつくりは、元肥を少なくし、追肥で追つていく形だ。

「収量を上げるにはこれが一番。ワラ



平田さん。平成22年から鈴木養鶏場に飼料米を出荷

をつくるんでなく、モミをとるんだから、葉っぱでなく穂に肥料をくれない」という。

なんでも、事情あって小学校五年生のときに、明治生まれの六二歳のおじいさんとの二人暮らしとなったとか。

「オヤジが戦死しておらんかったから、ちゃんと教えてもらっとらん。稲作は二十歳の頃から自分でやっとるが、ただの見よう見まねじゃった」

当時の施肥は、カマス袋に入ったオール一三だか一四だかの化成肥料を根肥（元肥）で五〇kg入れて終わり。初期にみごとな青田となるが、案の定、収穫すると小米ばかりの「ワラづくり」。収量はわずか二石（三〇〇kg）ほどだった。

数量払いで色めき立った

ところが、「片倉（権次郎）さんやったかな。イネつくり日本一の人の本を読んで、つくり方を変えたら、とた

んに量ができたたんよ」。元肥は少なく、イネがお腹に穂を宿してからの追肥重点。ワラではなく、米粒を育てる稲作だ。「二石の収量が一気に三石（四五〇kg）に増えたよ。台風がこなければ三石五斗（五二五kg）とれた」

多収のおもしろさを経験してきたから、現在の経営といえば、食用米（品種・ヒノヒカリ）はわずか三〇aの面積で一発肥料を主体にしてラクをする。一方、飼料米（品種・タカナリ）は二・七haで、追肥を三〜四回やるほどの手間のかけようだ。

穂肥時期は 毎日バケツを抱えて

さて、二〇一五年の平田さんの栽培

暦は一六二ページの表のとおり。チッソ肥料は主に塩安。「粒が大きくて散布しやすいし、色が白くて飛んだかどうかを目で確認しやすい」からだとか。

元肥チッソは三・三kg。それだけで茎数を確保したいが、肥料切れの心配がしたら、分けつ肥を少しやる。そして、茎数が確保できたところで、強めの中干しをする。

「アゼ際にはヒビが入っても、田んぼの中の低いところは水が溜まって、じゅ

飼料米のタカナリ。ニワトリにはモミの
まま給餌される。モミガラが消化器官内
を通り、鶏糞の品質が向上する



飼料米のモミ出荷に必要な粗選機を手作り

鈴木養鶏場への納入は、フレコンバッグによるモミ出荷だから、モミすり・選別の作業は要らない。ただし、ゴミクズやイナコウジのついたモミは粗選機（モミクリーナー）で取り除く必要がある。

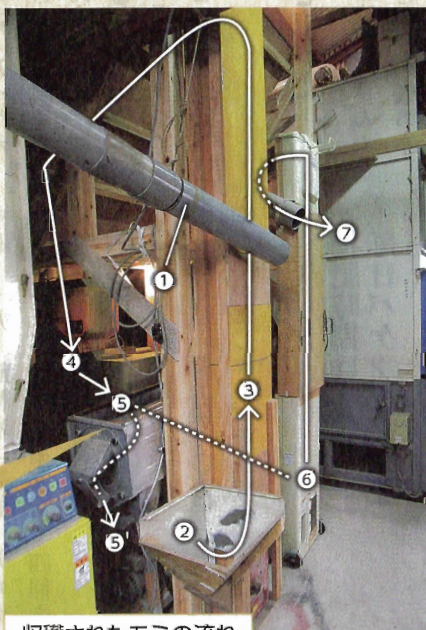
粗選機は1台20万～30万円するが、平田さんは、農機具店でスクラップにする昔のモミすり機をもらい受けて、手作りした。



イナコウジのついたモミ（矢印）。
取り除いてから出荷する



モミすり機に付属していたライスグレーダー。ペンチで隙間を広げると、ちょうど粗選機の網目の3.5mm程度に開いた。モミは隙間から落ち、イナコウジのついたモミなどは網の出口からゴミクズへ



収穫されたモミの流れ

- ① 乾燥機の出口（②のホッパーに突っ込む）
- ② 昇降機のホッパー（収穫されたモミがここに落とされる）
- ③ 昇降機A
- ④ モミすり機（素通りするが、揺動板で軽いゴミは取り除かれる）
- ⑤ ライスグレーダーを改良した粗選機（イナコウジなどの重いゴミを取り除く）
- ⑤' 粗選機の網の出口
- ⑥ 昇降機B
- ⑦ フォークリフトにフレコンバッグを吊り下げて出荷用のモミを受けとる



幼穂。長さ約10mm。平田さんは、生長の早いイネの幼穂がこれよりもっと小さな段階でリン酸を追肥し、その後、この長さの前後でチツソを打つ（倉持正実撮影、Kも）



葉鞘をむいて、幼穂の長さを確認する（K）

るい（ぬかる）ところもある。そんなときは、中に入って手で溝を掻いてアゼ際まで水を引く」ほどの徹底ぶりだ。

穂肥の時期にはポケットにカッターナイフを忍ばせ、しょっちゅうイネのお腹を裂いたり、指先でむいたりして、その時を見極める。幼穂がちよつとでも見えたら、すぐにリン酸肥料をふってイネをバリバリに硬くし、四日後くらいにチツソをふる。葉色を見ながら一週間後くらいにまた穂肥。さらに、もう一回くらい施すが、このときはもう田んぼに行くたびにバケツを小脇に抱えて持っていく。毎回肥料を二kgほど入れておき、葉色が薄くなったところがあれば、すかさず手持ちの肥料をふるのだ。

冒険的な自己流イネでもOK

ただし、品種をタカナリにして二年目の昨年は、欲にかられてチツソ過多となったようで、イモチがけっこう出

平田さんの栽培暦

(2015年作、タカナリ、施肥量は反当量)

前年秋	鶏糞 500kg
5月15日	タネ播き 箱180g播き 露地・平置き育苗
6月5日～	代かき、元肥 チッソ3.3kg
6月7日～	田植え 坪60株、1株3～4本植え
7月15日	中干し
7月18日	分けつ肥 チッソ1.3kg
8月6日	天狗燐肥 (または、くりんか) 20kg
8月10日	穂肥① チッソ4kg
8月17日	穂肥② チッソ2.7kg
8月20日	穂肥③ チッソ2.1kg
8月末	出穂
10月22日～	収穫

- * 除草剤は田植え後5～7日に銀河ジャンボ400g
- * 病虫害防除は7月中旬のアルバリン (スタークル) 粒剤4kg、8月下旬にも同3kg

た。イネツトムシやウンカの害にも遭って、夏場に二度の薬剤散布もした。収穫時、イモチ発生区を先に刈り取って約1ha分の収量を測ると、モミ重量で反当八七〇kgだった。最終的には、全二・七haの平均で九〇〇kgとなったから、上手につくれば九三〇kgとれたことになる。

「チッソの成分量を測ったりしたのは、二、三年前からのこと。だいたいは昔からの感覚で、イネの表情を見ながら、およその量をやちちよるだけ。ぜんぶ自己流じゃ。本当のイネづくりじゃありません」
たしかに、綿密に肥効を計算して品質の高い米を確実にとるイネづくりで



鈴木養鶏場から運ばれる鶏糞。
1反にフレコンバッグ1袋500kgを散布

はないかもしれない。でも、飼料米生産なら、食味を気にする必要はないし、むしろ高タンパクな米は大歓迎だ。カメムシ害があっても、小米があっても収量のうち。だから、平田さんのような冒険的な自己流イネが許される。今一番勢いのあるイネづくりなのである。